



千葉市

未来に誇れる 郷土をつくり、

次世代へと引き継ぐ



自然環境の中で、野外活動や集団宿泊などのさまざまな体験活動が行われる

夢と誇りを育てる都市づくり

首都圏の中では横浜市、川崎市につづく3番目の政令指定都市であり、JR千葉駅を中心とした千葉都心、幕張メッセや千葉マリスタジアムのある幕張新都心、商業、居住、公園など多様な都市機能を持つ蘇我副都心の3つの都心部を起点として着実に発展をつづける千葉市。近年は「千葉ロッテマリーンズ」と「ジェフユナイテッド千葉」という2つの人気プロスポーツ・チームのホームタウンとしても有名である。

千葉市では、今年度より「夢と誇りもてる 安全・安心のまちづくり」を指し、「第2次5か年計画」をスタート。12項目の「まちづくりの大切な視点」のひとつとして、「ユニバーサルデザインによるまちづくり」を掲げている。具体的

には公共空間のバリアフリー化事業として、電線共同溝の整備による歩行空間の無電柱化、駅前広場や病院周辺のバス停でのシェルターの設置、ノンステップバスの導入などを推進する。

もうひとつの柱が障害者関連の事業である。障害のある児童を一般学級へ受け入れるべく、すでに建設が終わった学校については、新たにエレベーターを設置。また、障害のある児童を支援するためにボランティアのサポーターを配置し、3人でローテーションを組んで一人の児童を介助する取り組みも始まった。

「教員志望の学生さんなどにボランティア登録をしてもらい、実際の学校教育の現場を体験していただきながら、障害のあるお子さんをサポートする。支援する側、される側の両方にとって意味がある取り組みにしたいということで、今年度



鈴木達也さん



加瀬直之さん



行政などの中枢管理機能を中心として商業・業務機能、文化機能を有する千葉都心

緑の中で生きる力を育む

は支援対象は30名、ボランティアは90名を予定しています」と企画課長の鈴木達也さんは話す。

首都圏の大都市でありながら豊かな自然環境にも恵まれた千葉市では、森林、里山、谷津田など、この地域特有の自然や農村景観の保全・再生も積極的に進めている。また、こうした豊かな自然環境を活かし、野外活動や集団宿泊、環境学習などのさまざまな体験活動を通じて、子どもたちの健全育成を図るべく、隣接する長生郡長柄町に「千葉市少年自然の家」を建設した。

県立笠森鶴舞自然公園内に位置するこの施設の建設にあたっては、環境保全を第一に考え、周囲の自然環境には極力手を加えずにそのまま利用し、野生動物や



美しい街並みで知られる幕張ベイタウン



自然環境に親しむために「ふれあい自然観察会」なども開催される

昆虫などの生態系を保全するため、野外照明にも太陽光発電を利用して照度を落とすなどの工夫もした。また、少年自然の家としては全国で初めて運営にPFIの手法を導入し、民間のノウハウを活用した効率的で効果的なサービスの提供を行っている。

「これまでも千葉市では小学6年生を対象に、長野県の町村と連携したり、県内の施設を使って林間学校や農山村留学を行っていました。より多くの子どもたちに集団での宿泊や自然体験をさせたいという声が多かった」と施設建設の経緯について、市教育委員会の加瀬直之さんは言う。

現在では、市内120校の小学5年生が2泊3日で移動教室、6年生が3泊4日の農山村留学で利用するほか、養護学校と障害児学級のキャンプや教育センターなどが主催するキャンプも活発に行われている。

そのほかにも、近隣の茂原市や長柄町の小中学生、ボーイスカウトやガールスカウト、スポーツ少年団などの少年団体、そしてその引率者や家族が、週末や夏休み、冬休みに施設を利用して。お父さんやお母さん、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に家族みんなで使ってくれる方が、子どもの健全育成にもつながる

人へのやさしさが安心を生む

のどという。2005年4月のオープン以降、運営も順調で、ニート対策としての人間関係づくりのプログラムや地元農家やJAと提携した地産地消の食育プログラムなど、新しい試みも積極的に行われているようだ。

「千葉市少年自然の家」のもうひとつの特徴が、段差のない構造や多目的トイレ（一部オストメイト対応）、車いすでも入浴できる浴室など、ユニバーサルデザインを全面的に導入して施設がつけられていること。車いすを使う子どもたちの利用も少なくないが、すべての施設を問題なく利用できるという。

「ご家族でいらっしゃることも想定して、大人でも充分耐えられる大きさで、高齢の方や障害のある方がいらしても不自由がないようにユニバーサルデザイン感覚を取り入れ、市民誰でもが使えるように見直してつくりました」とユニバーサルデザイン導入の理由について加瀬さんは語る。

地域の豊かな自然環境と人間環境を誇りを持って次世代へ引き継ぐこと。それが安全で安心して暮らせるユニバーサルなまちづくりへの一番の近道なのかもしれない。



青少年交流活動センター「うら・らめー」外観



「地域子育て支援センター」での交流会に参加するお母さんと子どもたち



マンションやホテルが建ち並ぶ新町地区の街並み



旧江戸川沿いの元町地区から、埋め立てにより徐々に拡大していった浦安市の様子



浦安市

地域内分権を進め、個性豊かな

独自性を発揮する

歴史と世代を象徴する3つのエリア

東京湾奥部に位置し、旧江戸川を隔てて東京都江戸川区と接する浦安市は、全国でも高齢化率が最も低く、生産年齢人口が最も高い「日本一若いまち」である。1965年に始まった埋め立て事業により市域が約4倍に拡大した結果、急速な都市化が進展。近年は、東京ディズニーランドや東京ディズニーシー、大型リゾートホテルなどを核としたアーバンリゾートゾーン・東京ベイエリアを代表する都市として発展をつづけている。

1998年に市長に就任して以降、松崎秀樹市長は「市民参加条例」や「市民活動促進指針」を定めるなど、ボランティアやNPOの活動を積極的に支援し、市民と行政の協働によるまちづくりを推進してきた。現在、浦安市では「人が

す。それが実現できれば、高齢化も防災・防犯の問題も怖くありません」

地域内移住と地域ぐるみの子育て支援

東西6・06km、南北6・23km、総面積16・98km²のコンパクトな市域に、世代の異なる約15万6000の人が暮らす浦安では、住み替えによる世代間交代も順調に進んでいるようだ。子育てを終えた高齢世代が、戸建て住宅から駅にも近く、便利でゆとりのある2DKやケア付マンションへ住み替え、逆に子どものいる若い世代が戸建ての多い中町地区などへ転入し、建て替えが進んでいるという。

少子化についても、浦安市では元町地区や新町地区を中心に、子どもの数もわずかながら増加する傾向にあるという。今年4月には新たに小学校2校と中学校1校が開校、保育園の待機児童の解消のために3つの保育園も開園した。また、園内には子育ての負担軽減や育児不安の解消を図るため、「地域子育て支援センター」を設置し、地域ぐるみでの子育て支援体制が整えられている。

また、子どもたちや青少年の育成・交流の場づくりとして、「児童育成クラブ」の建設・増設も進められている。昨年12月には東京ディズニーランドを運営する

躍動するまち・浦安」を掲げ、2008年度を初年度とする第2期基本計画の策定に着手したが、これについても市民と行政の協働を基軸におき、100名程度の市民を中心とした「市民会議」を設けて、計画づくりが行われるという。

新たな10年間の基本計画の中で、松崎市長が目指すのが「地域内分権」によるまちづくり。埋め立て前からある下町情緒豊かな元町地区、団塊の世代より上の高齢者が多く住み、第1期埋め立ての中町地区、働き盛りの若い世代が多い第2期埋め立ての新町地区、それぞれの地域の街並みや文化、伝統を活かし、ネットワーク化することで個性ある浦安を創造したいと松崎市長は言う。

「高齢化率が5%台で、若い子育て世代が多く住む新町地区で、高齢化社会の在り方を語ってもあまり関心を持たれませ

（株）オリエンタルランドとの共同事業により、青少年交流活動センター「うら・らめー」がオープン。団体生活や交流を通じて青少年の健全育成を図るとともに、企業を巻き込んだ協働体制が整えられている。

スマート・ガバメントを目指して

多忙な公務の中、今年3月までの2年間、明治大学の公共政策大学院ガバナンス研究所で学び、修士課程を取得した松崎市長は、最後にこれからの市政のビジョンについて語った。

「行政、ガバメントが上から一方的に指示して統治するという行政スタイルは完全に終わりを迎えるつあります。これからはスマート・ガバメント、つまり運営・管理などのノウハウも含め、市民や民間企業の持つ高い能力を引き出し、有効に活用する体制を行政がいかに構築していくかが大切です。」

もともと浦安という名前には「浦、安かれ」という水辺の平和と漁場の安泰を願った先人たちの想いが込められています。また、辞書によれば浦安は海洋国家である日本の古称・美称でもあると載っています。一人ひとりの市民が輝き躍動する浦安のまちづくりが、全国へと波及し、日本全体をより良い方向へと導く一助になればと考えています」



松崎秀樹浦安市長



館山市・南房総市

地域、行政、NPOの
連携で展開する

ユニバーサルツーリズム



観光に携わる事業者に向けて作成された「ユニバーサルツーリズム ヒント・実例集」(発行：千葉県)



沖ノ島無人島体験ツアーを実施しているNPOたてやま・海辺の鑑定団は、今年、関東運輸局長から観光功労者として表彰された

花摘みや海辺の散歩の モニターツアーを実施

房総半島南部は変化に富んだ海岸線や温暖な気候から、春は花摘み、夏は海水浴客でにぎわう首都圏の観光エリア。平成16年および17年に県のユニバーサルツーリズム事業のモデル地区として、館山市と富浦町（現南房総市）で、ワークショップやモニターツアーが実施された。その成果を活かし、すべての人が楽しめる体験型の観光プログラムや事前情報の提供、NPOとのコラボレーションなどでユニバーサルツーリズムを推進している。

平成17年度モデル事業の一環として行われた館山・富浦のモニターツアーでは、異なる障害を持つ人たちが、花摘みやフラワーアレンジメント、海辺の散歩などを体験。モニターリングを通して、観光スポットのアクセシビリティの確認はもち

ろんのこと、五感で楽しめる体験型観光のあり方が検証された。

環境保全と体験型観光を实践する たてやま・海辺の鑑定団

「東京湾の南端に位置する沖ノ島は自然の宝庫。サンゴが浅瀬にも生息しているの海に潜らなくても観察できますよ」と目を輝かせる三瓶雅延さん。長年、館山の環境保全活動に取り組み、平成9年「沖ノ島のサンゴを見守る会」を結成。仲間とサンゴの観察会やビーチコーミングを開催し、地域の子どもたちをはじめ、多くの人に沖ノ島の自然を紹介してきた。平成16年にNPO法人たてやま・海辺の鑑定団を設立。館山市観光協会に協力して「沖ノ島・無人島探検」などの体験型学習プログラムを行っている。昨年は、障害福祉センターの人たちや聾学校の生徒を対象に体験ツアーを実施。以前から



初心者でも楽しめるシーカヤック



アクセステイニングは、初心者や子ども、障害がある人でも安心して楽しめる小型ヨット

子どもや障害を持つ人たちなど多様な参加者との交流があり、ユニバーサルツーリズムもその延長だと言う。

モニターツアーで沖ノ島を訪れた上山のり子さんは、ダイビングと小型船舶操縦士2級のライセンス保持者。「今度は館山のダイビングスポットに行ってみたく」と休日のプランを計画 중이다。

6月4日には平砂浦でウォーキング大会（平砂浦ウォーキング実行委員会主催）が開催された。白砂青松100選に選ばれた景色を楽しみながら10kmのコースを自由なペースで歩けるのが魅力。三瓶さんは「海に触れると心身が癒されます。今後もシーサイドセラピー（海岸浴）を多くの人に体験して欲しい」と意欲を語る。

**NPOの連携で
ユニバーサルツーリズムの情報発信**

今年からは、異なる団体が協力し、誰もがビーチコーミングやシユノーケリング、



地図とピクトグラムなどを活用し、観光施設のUDなど総合的な観光情報を提供する「南房総いいとこどり」
<http://visit.city.minamiboso.chiba.jp/uv/>



沖ノ島のモニターツアー。三瓶さんから説明を受ける上山さんは、オフロードタイプの車いす「ランティーズ」を試乗



館山市中里の知的障害のある人の施設「中里ワークホーム」などが経営する「ふれあいショップ平砂浦」



「ふれあいショップ平砂浦」では、ポピーなど季節の花摘みもリーズナブルな値段で楽しめる

アクセステイニングなどを楽しめる連携プログラムが実施される。好きなアクティビティを自由に選べるように選択肢を増やすことで、オーダーメイドの滞在型観光プランも可能になる。地元食材を使った料理や温泉組合とも連携し、ユニバーサルツーリズムの拡大を図る。

館山市では、平成16年に「たてやま・コミュニティビジネス研究会」を立ち上げ、地域のNPO、観光事業者とともにコミュニティビジネスの可能性を探ってきた。

館山市観光立市推進課体験交流センターの山口孝副主査は「収益性のあるビジネスにすることで継続的な事業展開が可能になり、地域の活性化につながる」と力説する。観光産業をUDで横断的につなぐことで集客力を高め、地域連携・活性化を目指す。学びと感動体験の旅をキーワードに修学旅行の誘致にも積極的だ。秋には砂浜でも走れる車いす、ランディ

観光客へのおもてなしと 障害を持つ人の就労の場

日本のだい100選のひとつ、フラワーライン沿いにある「ふれあいショップ平砂浦」では、花摘みやイチゴ狩りが楽しめ、新鮮な野菜や名産品などが買える。ここは、知的障害のある人たちの就労の場であり、観光客へのおもてなしをする交流の場でもある。これもユニバーサルツーリズムのひとつの形だといえる。

千葉県商工労働部観光課観光資源開発室の山口秀輝室長は「高齢化社会が進む中で千葉県は首都圏在住者が気軽に余暇を楽しむには最適な場所。これまでの蓄積を活かしてユニバーサルツーリズムを点から面へと広げていきたい」と言う。地域を愛する人たちに支えられている新しいツーリズムの形が、訪れる人に旅の楽しさや感動を与えていくことだろう。